氏 名 （ 本 籍 ）	ボウマン　マイケル　ジョン（カナダ）
学 位 の 種 類	博　士　（美　術）
学 位 記 番 号	博　美　第 159 号
学位授与年月日	平成18年 3 月24日
学位論文等題目	〈作品〉黄金の館に生える木 〈論文〉時間のはざま
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　助教授　（美術学部）　東　谷　武　美
（論文第１副査）	〃　〃　（　〃　）　佐　藤　道　信
（作品第１副査）	〃　教　授　（　〃　）　坂　田　哲　也
（副査）	〃　〃　（　〃　）　櫃　田　伸　也

（論文内容の要旨）

1　私はなぜ芸術作品を作るのか？
2　疑問をぶつける
3　歴史の検証と信仰の成り立ち
4　近代科学と相互に関係を作ること
5　私の個人的歴史
6　歴史を創る
7　カナダの風景
8　日本の自然
9　題目の写真
10　時間のはざま
11　時間の色
12　コンピュータを表現用具として使う
　オリジナルの写真
　フォトショップでのレイヤー
13　作　　品
　忘れ去られた思い出
　鋼 の 家
　忘れ去られた記憶
　時間を忘れる
　旅行の記憶
　記憶をじっと見つめる
　見捨てられた記憶
　黄金の館に生える木
14　最 後 に
作 品 篇
参考文献

1　何故私は芸術作品を作るのか？

私たちが、自分たちとそれを取り囲む自然界との関係をどう受け取るかは、私たちのいる社会においての先祖から代々伝わっている遺物によって形成されている。社会はそれぞれ全く異なった人間と自然との関係に対する理解の仕方を引き出し、進化させてきた。私は、異なる文化や社会を持つ人々が、自分と自然との関係に対して違った考えを持っているという事を理解するのに興味がある。

又、私が興味を持つのは、絶え間ない人類の進化、世代から世代へと度重なる変化、そして異なる文化や伝統の下、絶えることの無い循環を繰り返す生命である。そして、私はそれらの事を自分の作品の中で追求している。

2　疑問をぶつける

私たちのとる行動、そして創造するものの全てはこれから後の人達にとっての過去をのぞく窓になる。私が面白いと思うのは、その窓が決してくっきりと澄んではいないということだ。私たちは彼らの神話や物語を想像することしかできない。私たちが過去の物を見るとき、私たちはその時代の人々が何を信じていたのかという事に自由に思いをめぐらすことができる。その後、私達は自分達と彼らを比べるのだ。この、間の時間、そしてこの必然の変化の過程こそが私を魅了するものだ。過去の習慣や信仰などの遺物や名残りを目にする時、私たちが今、社会だと信じている物はいかにして発展してきたのか、どんな状況が私達の行動に確信を持たせたのかということを疑問に思う。たとえば、何故ひとつの儀式とその信念は受け継がれ残っているのに、もう片方は忘れられているのか？又、何故ひとつの社会は無に衰退し、もうひとつは世界中へと展開していくことができるのか？

3　歴史の検証と信仰の成り立ち

太古の文明、文化に対する数々の考古学の研究を通すことや、近年の様々な科学分野での進歩のおかげで、私達は何千年も前に存在していた沢山の社会を知ることが出来てきている。

歴史を通して、私達は神話や伝説、そして儀式などを用いて私達の生命を定義づけ、意味を与えようとしてきた。私達はこういった神話や物語で、見るもの、感じるもの、触れるもの全ての存在を論理付ける。そして儀式を介して、自分達が世界とどう接していくべきなのかを定義づけている。

4　近代的科学と相互に関係をつくること

近代的科学の進歩は有力な確証として、世界中の人間はアフリカ大陸のどこか、最有力候補としてエチオピアで誕生しそこから世界中へ進出していったと考えられるとした。それは、現在私達にどういった意味を持つのだろう？私は、この地球上の人間は全員、私達の先祖から伝わる遺物を通してつながっていると考えている。私達が、心を開いて見ることが出来たら、これまでの過去100年間で得た知識の多くが､全ての文化と全ての人々はつながっていることを示していることが見当つくであろう。

5　私の個人的歴史

私は全くと言っていいほど自分の根源との繋がりがなかった。私が知る限りでは、私の家族の歴史は私の幼少時代に住んだことのある五つの街だけだった｡それ以上の歴史や根源は何もしらなかった。それはなぜか？多分、私の作品は起こり得る物語を追求するもので、それらは場所にまつわっているからだろう。

6　歴史を創る

私の思想に強い影響を与えたアメリカのアーティストはチャールズ・シモンズだった。彼の作品の中で、彼は「リトルピープル」という、想像の世界でしか無い人種の文明を、彼らの歴史、思想体系、

そして生き様も含めて創りあげた。この人達を見た者はいない。私達は、彼らが残した建造物を通してしか彼らを知らないのだ。そこで、私達は必然的に彼らが何を信じていたのかと考えさせられる。そして、自分達自身の信念などについて考え出し、私達が建造し見捨てた物などに未来の人たちのためのヒントがどう含まれているかと考えるのだ。

7　カナダの風景

カナダは広々とした自然環境の国だと思われている。これは、著しく生身で、洗練されていなく、雑然としている自然である。多くの面で、それはまだ本来の荒野である。険しく広がる圧延の平野や、見るからに終わりのない森、ごつごつした山やクリスタルの様に透き通った湖と川など、カナダの自然を作り上げるそれらの大きさを推測するのは難しい。この国のほとんどはとても寒く長い厳しい冬季がある。

私がカナダの文化や歴史を、世界中の他の社会のそれらと比べてみる時度々不思議に思うのは、カナダという土地との物理的、精神的な関係が、何世紀も先祖代々同じ場所に住んできた他の社会とどう異なるのかという事だ。

8　日本の自然

日本では、人々は自然の中に神々が存在すると信じていた。その結果、日本人が自分の家に盆栽を置いたとき、それはただの木ではなく、それは神であったのだ。自然と、彼らはそれをその考えに従って敬った。私達は、教会やその他崇拝の場所に神聖さを感じるが、日本ではその神聖さは様々な形や場所で存在するのだと思う。

建築学上、日本のディテールにまで細かく注意された建造物のつくりは、カナダの住民を様々な要素から守るために必要に迫られてデザインされた住宅とは明らかに対照的である。カナダでは、自然と私たちが作る住居との間でのバランスを少し意識した努力がなされている。私達は、自分達の住居を自然の一部として考慮する事は絶対にない。カナダ人は、自然とは私達の家が経験するものだと考える節がある。自然は厳しい敵であり、私達の家は、私達の聖域なのだ。

9　題目の写真

最近、私の作品はほとんど写真がベースとなっている。写真は、切りはずしたり、一部だけを使ったり、他の物と混ぜたりして使う事が出来るため、ただの一枚の写真よりずっとおもしろいと私は思っている。

10　時間のはざま

私が写真に収めようとしてきた主題は時と共に少しだけ変化した。五日市にいたとき、小さい“maquettes”という虚構の見捨てられた廃墟の彫刻をいくつか建てて撮影し、それを作品に使った。現在、私が撮影するものたちは歴史を通して時の移り変わりを見せる現実の物だ。多くの時、私はその写真を後々使うかどうかわからないまま撮影する。なぜならば、それらが私の欲しているものを粉れもなく明白にする何かを持ち合わせているかどうかは分からないからである。

11　時間の色

私は、作品のなかで沢山の色を使わない。セピアを使うのだ。それはなぜならある意味、セピアは歴史を感じさせる色を含んでいるからなのだ。それは、地球の色。そして私が求めているのは、夢の様な感じでありながらも現実の質を持ち合わせるそんな色で、セピアはそれを提供してくれると感じている。私の好きな神秘的な雰囲気を運んでいるように見えるのだ。

12　コンピューターを表現用具として使う

コンピューターを写真と一緒に使い出してから何年かになる。最初、私はアルバータ大学の最終学年で（1997）自分の写真を版画製作で使う中での補足用具としてコンピューターを使っていた。その当時、古くからの暗室を使うというプロセスに代わって、コンピューターを使ってフィルムを外出することが可能になったのだ。それまで私は暗室で何時間もの時間を費やし、その上仕上がりに満足いかないことが多かったのでその時間はますます増えていった。私は自分の写真をもっとコントロールできるようにしたかったし、一定のぱりっとした感じを維持しなければ、私の頭の中にあるイメージとは一致しないと思っていた。そして、コンピューターはダークルームでの時間を省略する事ができ、他の方法ではどうしても無理だったイメージのコントロールを可能にしたのだ。私はそれからずっとコンピューターを使っている。

今日、多くのアーティストは、古いテクニックと新しいテクニックをブレンドさせることでもっと自分自身をうまく表現できると感じている。私は伝統的な版画のプロセスをなぞらず、コンピューターを使うとき一番自分をうまく表現できると感じている。

13　作　　品

忘れ去られた思い出
鋼 の 家
忘れ去られた記憶
旅行の記憶
記憶をじっと見つめる
見捨てられた記憶
黄金の館に生える木

14　最 後 に

ある意味、私の作品は神聖なる気持ちを私たちの周りに存在するものたちに返していく方法になったのかと思う。もしかすると、これは自分に感光性を与えなおすというものなのかもしれない。その場所での感覚や、経験を運ぶ作品を創るということはとても難しいことだと思う。もし、その建物の写真を撮るだけであったら、その場所のパワーや、そこにいるという感覚は伝わらない。だから、私が自分の作品を創るとき、イメージを組み合わせたり、重ねたりしてなにか神聖で神秘的な気持ちを出せるようにしているのだ。私は、自分の作品を通して他の人たちと共にこの人生の神秘、そして疑問を分かち合える事を願っている。